

エジプト学研究第 20 号 2014 年

The Journal of Egyptian Studies Vol.20, 2014

目次

〈序文〉	吉村作治	3
〈調査報告〉		
2013 年 太陽の船プロジェクト 活動報告	黒河内宏昌・吉村作治	5
エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告－第 19 次発掘調査－	吉村作治・矢澤 健・近藤二郎・西本真一・和田浩一郎	13
第 6 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報	近藤二郎・吉村作治・柏木裕之・河合 望・高橋寿光	43
〈論文〉		
エジプト先王朝時代の穿孔技術に関する実験考古学的研究 －フリント製小型ドリルの切削能力と形状変化の観察－	長屋憲慶	59
〈研究ノート〉		
クシュの碑文を母系制として読む －即位の記録と「アララとアメン・ラーの契約」－	齋藤久美子	83
エジプト先王朝時代における石製容器の地域性	竹野内恵太	99
オブジェクト・フリーズ (<i>frise d'objets</i>) と出土遺物の比較 －装身具およびアミュレットを中心に－	山崎世理愛	115
〈動向〉		
争乱の中の大エジプト博物館建設と文化財保存修復をめぐる国際協力	高木規矩郎	131
〈活動報告〉		
2013 年度 早稲田大学エジプト学会活動報告		145
2013 年 エジプト調査概要		149
〈編集後記〉	近藤二郎	155

The Journal of Egyptian Studies Vol.20, 2014

CONTENTS

Preface	Sakuji YOSHIMURA	3
Field Reports		
Report of the Activity in 2013, Project of the Solar Boat	Hiromasa KUROKOCHI and Sakuji YOSHIMURA	5
Preliminary Report on the Waseda University Excavations at Dahshur North: Nineteenth Season	Sakuji YOSHIMURA, Ken YAZAWA, Jiro KONDO, Shinichi NISHIMOTO and Koichiro WADA	13
Preliminary Report on the Sixth Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian Expedition	Jiro KONDO, Sakuji YOSHIMURA, Hiroyuki KASHIWAGI, Nozomu KAWAI and Kazumitsu TAKAHASHI	43
Articles		
An Experimental Approach to the Drilling Technology in the Predynastic Period: Cutting Capability and Reduction Patterns of Flint Micro-drills	Kazuyoshi NAGAYA	59
Reading the Kushite Texts in the Matrilineal Context: Enthronement Records and the Covenant between Alara and Amen-Re	Kumiko SAITO	83
Regional Variation of Stone Vessels in Predynastic Egypt	Keita TAKENOUCI	99
Comparison between the <i>frise d'objets</i> and Burial Goods: Focused on the Ornaments and Amulets	Seria YAMAZAKI	115
Report	Kikuro TAKAGI	131
Activities of the Society, 2013-14		145
Brief Reports of Fieldworks in Egypt, 2013		149
Editor's Postscript	Jiro KONDO	155

エジプト先王朝時代における石製容器の地域性

竹野内 恵太*

Regional Variation of Stone Vessels in Predynastic Egypt

Keita Takenouchi*

Abstract

In Predynastic Egypt, there was a material evidence of significant regional variation in Upper Egypt. This regional variation was pronounced in the late Naqada I to early II, but disappeared by the middle Naqada II. Although previous studies have discussed about the regionality, almost all of them dealt with only mass-produced goods such as pottery and lithic and high-valuable objects have been ignored. Therefore, the stone vessel as the most valuable items in this period should be analyzed.

Regional production system of the stone vessels is assumed not to be autonomous production in each site, but intensive production in limited large political centers such as El-Amrah, Naqada, and Hierakonpolis where stone vessels were probably produced by specialized craftsmen. In fact, stone vessels have been found in larger quantities at large center than small center. Then, it is reasonable to assume that the finished products were supplied from the large centers to other areas (possible small sites). This is why the distribution pattern of stone vessels should be interpreted from a viewpoint of production and distribution.

This paper aims to analyze regional variation of stone vessels and provide a viewpoint about distribution pattern of high-valuable goods. In this analysis, stone vessels unearthed from 15 Predynastic sites in Upper and Lower Egypt were selected. The selected sites were divided into three areas in Upper Egypt; Badari area, Naqada area, and Abydos area. Firstly, I analyzed regional differences based on the shape and material of stone vessels in each area through Naqada IC to IIIB. Next, the classification was examined according to the patterns of the regional differences in each period, and finally transition of regional variation of stone vessels was traced.

As a result, regional variation of stone vessels was not disappeared in the mid of Naqada II, but widespread through the Predynastic period. It is possible that this result is due to the differentiation of production center and the sophistication of distribution system.

1. はじめに

エジプトの先王朝時代は、社会経済システムが複雑化し、国家が形作られる過渡期と言える。王朝時代の技術伝統や文化要素は、この時代で醸成されていたと考えてよい。その過程の中で、政治的に自立していた

* 早稲田大学大学院文学研究科修士課程

* *Graduated Student, School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University*

地域(=政体)が、交換や戦争という競合関係の中で地域間の接触を密にしていく。そして、その帰結である統合体こそが国家として認識されているのである。考古学的なアプローチからは、土器や石器の器種の地域間における地域差の消失および製品の規格化という現象を概ね捉えており、国家形成の文脈の中にその地域的物質文化の統合過程を位置づけて理解されている。しかし、土器や石器のような頻出する物品の分析が進展する一方で、奢侈品あるいは財に関して地域性に視点を据えた研究は、これまで皆無に等しい。

先王朝時代において最も代表的な奢侈品であるものに、石製容器(Stone Vessel)が挙げられる。石製容器は、当該期の早い段階から生産の専門性が高い遺物であり、各墓地遺跡から副葬品として一定量出土する典型的な遺物である。王朝時代へ連続する文化要素および発展する製作技術と捉えた際にも、当該期の石製容器を分析することは望ましいと言える。石製容器の地域性について研究した例はなく、未だ分析する余地は大いにある。そのため、本稿ではナイル川下流域に点在する諸遺跡出土の石製容器を対象として、その地域性と変容過程を分析する。また、地域性の形成と変容の要因となった生産体制と流通システムの変化についても言及する。

2. 既往研究と本論の目的

これまでの先王朝時代の文化的地域性に関する研究は、フィンケンシュタット(Finkenstaedt, E.)による白色交線文土器(Cross line ware)の彩文研究(Finkenstaedt 1980, 1981)やホルムズ(Holmes, C. L.)の石器組成および技術伝統の差異(Holmes 1989)、フリードマン(Friedman, R.)による集落址出土土器の器形・混和材・表面調整に関する研究(Friedman 1994)が、主立ったものとして挙げられる。氏らの成果から、少なくともナカダII前期までは、ヒエラコンポリス地域・ナカダ地域・アビュドス地域・バダリ地域それぞれが文化的地域性を有していることが共通見解となっている。ナカダII中期以降は、地域差が消失し、重大な地域性を看取できないとしている。上エジプト地域内部で均質化を迎えた物質文化は、ナカダII後期までに下エジプト地域へ波及する。この現象が、いわゆるナカダ文化波及(Naqadan Expansion)であり、ナカダ末期には上下エジプト間で文化的差異は認められなくなる¹⁾。

以上のように、物質文化における上下エジプト地域間・上エジプト地域内部の多様性とその統合過程は、土器および石器の研究領域では議論が進展している。これら遺物を生活必需品(Subsistence)として位置づけるならば、一方の財(Wealth)に位置づけられる石製容器に関する地域性研究は立ち後れていると言わざるを得ない。これまでの石製容器研究は、分類や編年といった基礎研究(Kouli 1976, Aston 1993)、副葬品アゼンブリッジにおける分析(Bard 1992など)が重点的に行われおり、マロリー・グリーノーによる玄武岩製容器の分析(Mallory-Greenough 2002)以外には分布論に至ったものは管見に触れない。

マロリー・グローノー(Mallory-Greenough, L.M.)は、先王朝時代から第1王朝時代にかけて容器の素材となった玄武岩の化学分析を行い、この石材がカイロ西部のエル・ハダディーからアブ・ロアシュに位置する産地で獲得されたことを明らかにした(Mallory-Greenough 1999)。そして、玄武岩製容器の分布から、先王朝時代ではマアディ遺跡で製作されたものが諸遺跡へ流通されていたが、第1王朝時代になるとヒエラコンポリス遺跡で製作されたものが「交易人」の手によって流通していたと考えた(Mallory-Greenough 2002)。地域性研究というよりも、玄武岩製容器という高価値な財の動態を分析することが目的であったものの、唯一の分布論として評価できる。

ひとえに石製容器などの財と位置づけられる副葬品が地域性研究の対象とならない理由は、概して出土量が少ないことに他ならないかもしれない。しかし、土器や石器は出土量が多いといってもあくまで物質文化を構成する一つの要素に過ぎない。考古学的なアプローチに立脚するのであれば、総合的な遺物の様相から

地域的な多様性を導き出すべきである。石製容器は素材を岩石という獲得に一定度のアクセス制限を内包し、加工時に多大な労働量を要する。事実、石製容器は大規模遺跡を中心として出土し、大規模遺跡において高度に専門化された集約的な生産であったことが認められている (Köhler 1995)。おそらく、石製容器の分布とその変遷は、大規模遺跡における集約的な生産と他遺跡への流通という視点から読み解く必要がある。

すなわち、本論の研究手順は、まず石製容器の器種組成および石材構成の地域分布を確認し、その地域的な多様性を類型化する。次に、先王朝時代の各時期で認識された分布パターンの形成要因を生産と流通という視点から模索する。

3. 対象遺跡および地域区分

本論で対象とする遺跡は、エルカブ遺跡 (Hendrickx 1996)、アルマント遺跡 (Mond and Myer 1934)、ナカダ遺跡 (Petrie 1895, Baumgartel 1985, Payne 1996)、アムラ遺跡 (Randall and Mace 1902)、アビュドス遺跡 (Randall and Mace 1902)、マハスナ遺跡 (Ayrton 1911)、バダリ遺跡 (Brunton and Caton-Tompson 1924, Brunton 1927)、カウ遺跡 (Brunton 1927)、ハマミーヤ遺跡 (Brunton and Caton-Tompson 1924, Brunton 1927)、モスタゲッタ遺跡 (Brunton 1937)、マトマール遺跡 (Brunton 1948)・ハラゲ遺跡 (Engelbach 1923)、ゲルゼ遺跡 (Petrie 1912, Stevenson 2009b)、タルカン遺跡 (Petrie 1913, 1914)、ミンシャト・アブ・オマル遺跡 (Kroeper und Wildung 1994, 2000) の計 15 遺跡を選定した (図 1)。分析対象は、これら 11 遺跡で出土している石製容器である²⁾。編年については、ヘンドリックス (Hendrickx, S.) による最新の土器編年を採用し、IC 期・IIA-B 期・IIC-D 期・IIIA-B 期と便宜的に時期区分する (Hendrickx 1996, 2006)。

以上の 11 遺跡を地域に区分して分析を行いたい。本論では、先で示した地域性の既往研究を参考として、上エジプト地域については、ナカダ地域 (アルマント遺跡・ナカダ遺跡)・アビュドス地域 (アムラー遺跡・マハスナ遺跡)・バダリ地域 (バダリ遺跡・モスタゲッタ遺跡・マトマール遺跡) の 3 地域を単位としてそれぞれ分析を行う。ゲルゼ遺跡やタルカン遺跡、ミンシャト・アブ・オマル遺跡 (以下ミンシャト遺跡) は、一括して下エジプト地域と呼称し、遺跡ごとに分析する。エルカブ遺跡出土の石製容器は IIIA-B 期のみであるため、先に示した上エジプト地域区分には入れず、単独で分析する。遺跡ごとの出土石製容器の内訳は次の通りである。エルカブ遺跡 (出土墓数: 19 基 石製容器個体数: 10 個体)・アルマント遺跡 (出土墓数: 23 基 石製容器個体数: 3 個体)・ナカダ遺跡 (出土墓数: 156 基 石製容器個体数: 86 個体)



図 1 ナイル川下流域

Fig.1 Nile Valley

6 個体)・アムラ遺跡(出土墓数:74 基 石製容器個体数:62 個体)・アビュドス遺跡(出土墓数:20 基 出土石製容器:5 個体)・マハスナ遺跡(出土墓数:16 基 石製容器個体数:4 個体)・バダリ遺跡(出土墓数:30 基 石製容器個体数:12 個体)・カウ遺跡(出土墓数:10 基 出土石製容器:3 個体)・ハマミーヤ遺跡(出土墓数:14 基 出土石製容器:9 個体)モスタゲッダ遺跡(出土墓数:30 基 石製容器個体数:14 個体)・マトマール遺跡(出土墓数:35 基 石製容器個体数:17 個体)・ハラゲ遺跡(出土墓数:8 基 石製容器個体数:8 個体)・ゲルゼ遺跡(出土墓数:45 基 石製容器個体数:93 個体)・タルカン遺跡(出土墓数:275 基 石製容器個体数:155 個体)・ミンシャト・アブ・オマル遺跡(出土墓数:35 基 石製容器個体数:59 個体)。

4. 本論の器形分類と使用石材について

(1) 器形分類

分析に先立ち、前提となる石製容器の器形分類について述べておく。これまで、石製容器の器形分類は、ピートリを始めとして(Petrie 1986, 1920)、アシュトン(Aston, B. G)やコウリー(Kouli, L)、マロリー・グリーンノー(Mallory-Greenough)らが行ってきた。コウリーは、ピートリによる石製容器のSD編年以降、初めて体系的な分類案を示した。対象時期幅は先王朝時代から第3王朝時代までと広範囲で、その分類設定は極めて仔細である(Kouli 1976)。しかし、後にアシュトンによって、コウリーの分類設定は細かすぎることで、時期的な特徴を勘案していないことが批判された。一方で、そのアシュトンは先王朝時代からグレコ・ローマ時代までの石製容器で特徴的な器形を抽出し、大まかな分類設定を試みている(Aston 1994)。

アシュトンも述べるように、氏の分類案は、新たに編年を組む目的のため設定したものではない。近年では、マロリー・グリーンノーが玄武岩製容器の分布研究の際に分類を試みている(Mallory-Greenough 2002)。

以上の分類案は、先王朝時代全体の石製容器に対して敷衍することが難しい。以前筆者が設定した分類についても、IIIA-B期の資料は用いていない(竹野内 2013)。よって本論の器形分類は、上記11遺跡出土の石製容器に基づいて新たに分類設定し、計34タイプを設けた(図2)。これまでの研究では、胴部や底部の形状よりも、把手の形状とその有無を上位の属性として認識しているため、本論の分類でもそれに準拠したい。詳細は基準表に譲ることとする(表1)。

まず、I類は円筒形を呈するものであり、さらにIa類・Ib類・Ic類に細分した。II類に

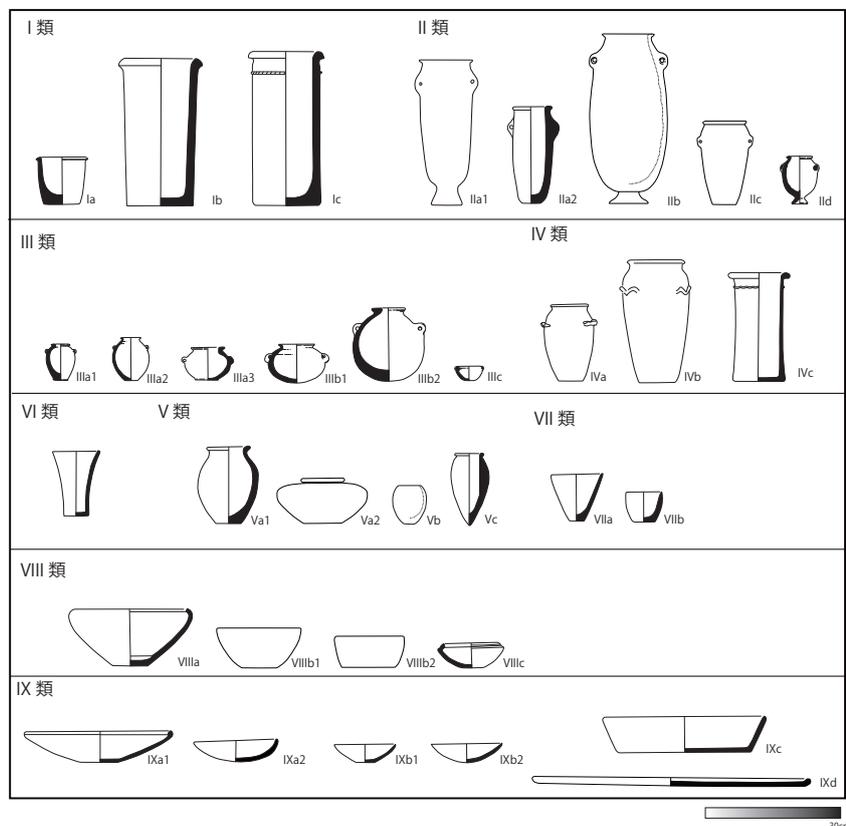


図2 本論の分類案
Fig.2 Classification of Stone Vessels

ついで、壺形で、耳状の把手 (Lug Handle) と脚台が附属することに特徴をもつ。II類は肩部から胴部にかけて張り出し方の相違によって、IIa類・IIb類・IIc類・IId類に分け、IIa類については脚台の有無でさらにIIa1類・IIa2類に細分した。続いてIII類だが、II類の耳状把手と異なり、管状の把手 (Tubular Handle) が附属し、脚台はもたない。III類については、平底と丸底で大別し、それぞれIIIa類・IIIb類とした。一方、IIIc類については、壺形でなく鉢形を呈するイレギュラーな器形であるが、胴部の形状よりも把手を最上位の属性として位置づけているため、III類に加えた。また、IIIa類とIIIb類は、さらに胴部の形状によって細分し、IIIa1類・IIIa2類・IIIa3類・IIIb1類・IIIb2類とした。IV類は、波状把手を附属する壺形である。さらに胴部の形状から分け、IVa類・IVb類・IVc類とした。IVc類に関しては、円筒形を呈するI類と類似する器形である。しかし、繰り返しになるが、把手の形状とその有無を重視し、本論ではIV類に組み込んだ。V類は無把手の壺形である。II類およびIII類の壺形はそれぞれ特徴的な把手を附属するが、V類は把手を附属せず、壺形を呈する器形として設定し、Va類・Vb類・Vc類の3類に区分した。また、Va類は口縁を作出するものとし、Va1類・Va2類とした。VI類は、ピーカー形を呈する。VII類・VIII類・IX類は、それぞれ環形・鉢形・皿形である。これらを区分する際、客観的な指標として胴部の最大径と器高の比率から算出した値を元に設定した³⁾。それぞれは際立って特徴的な属性を有していないため、抽出できた属性を元に細分した。

(2) 使用石材と産地について

石製容器の素材となった岩石は、石灰岩 (Limestone)、トラバーチン (Travertin)、玄武岩 (Basalt)、角礫岩 (Breccia)、斑岩 (Porphyry)、泥岩 (Mudstone)、蛇紋岩 (Serpentine)、凝灰岩 (Tuff) である⁴⁾。石灰岩やトラバーチンは、ナイル川下流域では比較

表1 分類基準表

Table 1 Criteria for Classification

Class	Type	Variation
I類 (円筒形)	a. 無把手で胴部がくびれず口縁部が外反する	平底
	b. 無把手で胴部がくびれる	平底
	c. 縄状把手付きで胴部がくびれる	平底
II類 (耳状把手付き壺)	a. 円筒形	1. 脚台 2. 平底
	b. 胴部が張る	脚台
	c. 肩部が張る	平底
	d. 底部が張る	脚台
III類 (管状把手付き壺)	a. 平底	1. 肩部が張り出し 2. 胴部が張り出す 3. 底部が張り出す
	b. 丸底	1. 底部が張り出す 2. 胴部全体が楕円形
	c. 浅鉢形で、口縁の作出なし	丸底
IV類 (波状把手壺)	a. 肩部が顕著に張り出す	平底
	b. 肩部がなだらか	平底
	c. 円筒形	平底
V類 (無把手壺)	a. 口縁が閉じ、肩部あるいは胴部が張り出す	1. 口縁作出あり 2. 口縁作出なし
	b. すんぐりした胴部	平底
	c. 底部の突端が尖る	尖底
VI類 (ピーカー形)	口縁が外傾、底部まで埋まる	平底
VII類 (環形)	a. 底径: 口径=1:2以下	平底
	b. 底径: 口径=3:5以上	平底
VIII類 (鉢形)	a. 口縁が内傾	平底
	b. 口縁が直立	1. 底径: 口径=1:2以下 2. 底径: 口径=3:5以上
	c. 口縁に段、いわゆるMeidum Bowl?	平底
IX類 (皿形)	a. 口縁が内傾	1. 平底 2. 丸底
	b. 口縁が直立	1. 平底 2. 丸底
	c. 底径: 口径=3:4以上	平底
	d. 器高が極端に浅い	平底

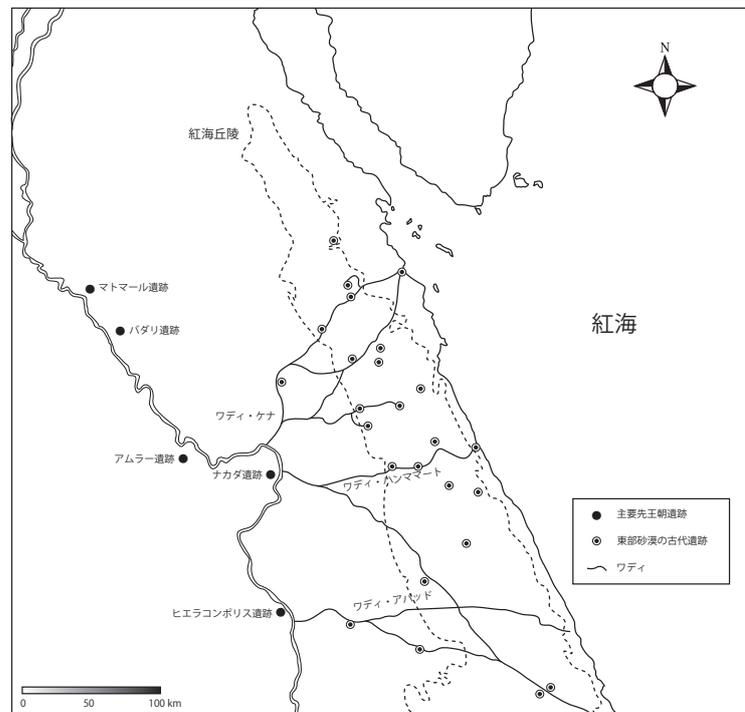


図3 東部砂漠におけるワディ (Sampsel 2003)

Fig.3 Wadis in the Eastern Desert

的どこでも産出する。玄武岩は、カイロ周辺とバハレーヤ・オアシス、エジプト中部、エジプト南部から主に産出する。マロリー・グリーンノーによると、先王朝時代から初期王朝時代に比定される玄武岩製容器は、全てカイロ西部から獲得されたことを指摘している (Mallory-Greenough 1999)。これは、下エジプト地域の先王朝時代マアディ遺跡の集落址から玄武岩製容器が大量に出土していることから裏付けられる。角礫岩や斑岩、蛇紋岩、凝灰岩は、東部砂漠の紅海丘陵において採掘地が見つかっており、地質学的には先カンブリア紀に形成された地層であるため、おそらくこれらの岩石は当該地域からしか産出しない。泥岩については、ワディ・ハンママートの砂岩層において採掘地が唯一見ついている。これら東部砂漠に位置する岩石は、ワディを介してのみアクセスすることができた (図3)。おそらく、ワディ・ハンママートやワディ・ケナが、石製容器やその他石製品の石材資源獲得のための重要な交通路として機能していたのだろう。

以上の内容を前提として、本稿の分析を行っていく。

5. 石製容器の器種構成・石材構成の地理的分布状況

(1) 器種構成の地理的分布状況

① IC 期 (図4)

ナカダ遺跡・アムラ遺跡・アビュドス遺跡・マハスナ遺跡・バダリ遺跡において石製容器の出土が認められる。ナカダ地域では、Ia類を主体とし、次いでII類が多い。タイプVIとIXb2は、この時期でナカダ遺跡しか出土が見られない。アビュドス地域も出土量こそ少ないものの、ナカダ地域と同様の器種構成を示す。バダリ地域では、II類のみが認められる。

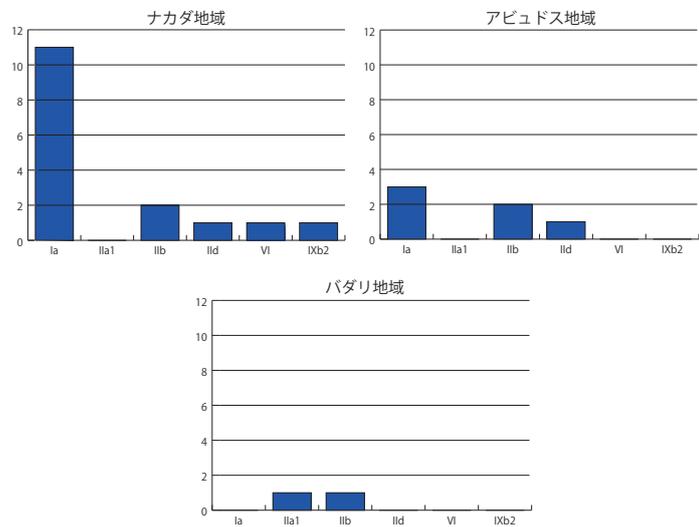


図4 IC期における器種構成

Fig.4 Shape Variation in IC

② IIA-B 期 (図5)

ナカダ遺跡・アルマント遺跡・アムラ遺跡・マハスナ遺跡・バダリ遺跡・マトマール遺跡で石製容器が出土する。基本的にバダリ遺跡およびマトマール遺跡のバダリ地域では、出土量が少なく、アルマント遺跡も1個体しか出土しない。出土の中心は、ナカダ遺跡とアムラ遺跡であることがわかる。ナカダ遺跡では、当該期で出土するほぼ全ての器形のバリエーションをカバーする。特筆すべき地域間の差異は、アムラ遺跡の

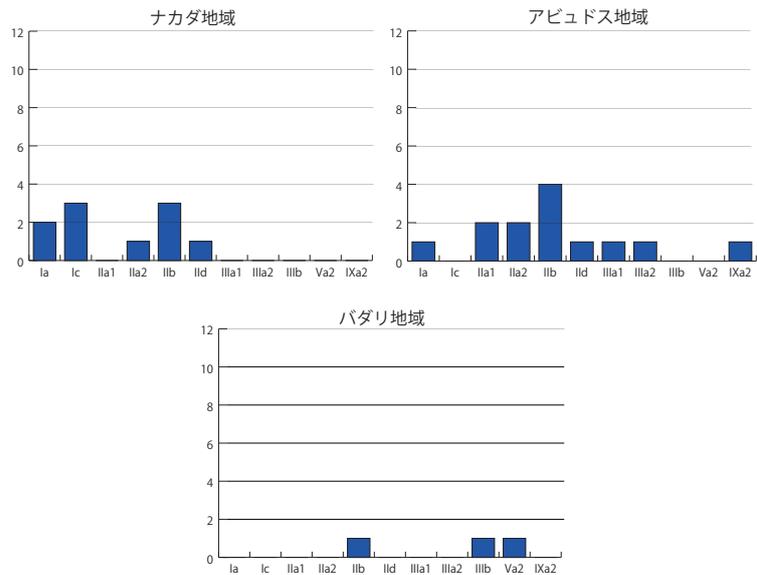
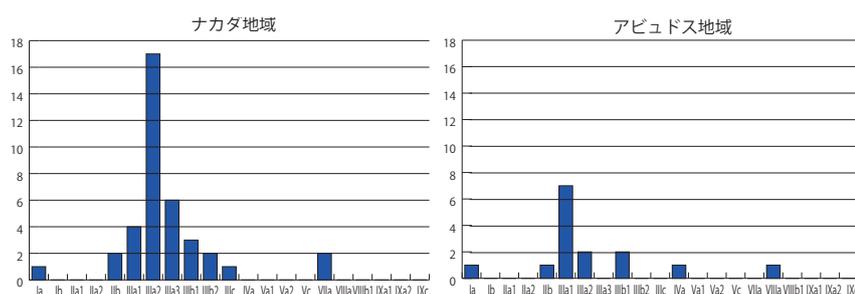


図5 IIA-B期における器種構成

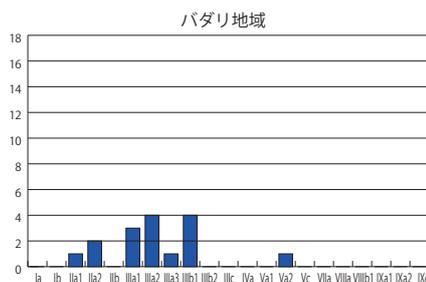
Fig.5 Shape Variation in IIA-B

Ic 類とバダリ遺跡およびマトマール遺跡における IIIb2 類と Va2 類の存在である。また、前時期に引き続き III 類はナカダ遺跡のみの出土を見せる。

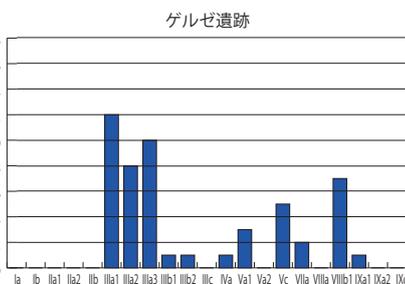


③ IIC-D 期 (図 6)

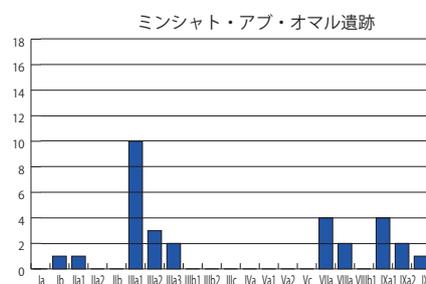
ナカダ遺跡・アルマント遺跡・アムラ遺跡・アビュドス遺跡・ハマミーヤ遺跡・カウ遺跡・バダリ遺跡・モスタゲッダ遺跡・マトマール遺跡・ゲルゼ遺跡・ミン



シャト遺跡といった 11 遺跡⁸で出土する。上エジプト内⁴部で器形における地域差は消失するが、上下エジプト



間⁸で著しい差異が認められる。VII 類・VIII 類・IX 類



は排他的に下エジプト地域

図 6 IIC-D 期における器種構成

Fig.6 Shape Variation in IIC-D

から出土する。すなわち、

上エジプト地域が壺類を保有するのに対し、下エジプト地域は杯・鉢・皿といった口縁が開いた器形をもち、上下エジプト地域間で器形の差異において二項の様相が窺える。また、V 類についてはゲルゼ遺跡が出土の中心である。その中でも、Vc 類は底部が尖底であることに特徴づけられ、この特異な器形はゲルゼ遺跡でしか出土を見せない。ハラゲ遺跡でも Va2 類・VIIa 類がそれぞれ 1 点出土している。加えて、II 類は、上エジプト地域で若干数残存しているが、下エジプト地域では出土が認められないことも両地域間の大きな差異である。ただ、前時期のナカダ地域で主体的であった IIa 類が、この時期ではバダリ地域にのみ現れることは特筆すべきことかもしれない。一方で、ミンシャト遺跡では IX 類が顕著であり、下エジプト地域内部でも若干の差異を孕むこともまた指摘できる。この時期に主流である III 類は、やはり全遺跡で出土する。

④ IIIA-B 期 (図 7)

エルカブ遺跡・ナカダ遺跡・アルマント遺跡・アムラ遺跡・ハマミーヤ遺跡・バダリ遺跡・マトマール遺跡・タルカン遺跡・ミンシャト遺跡の 9 遺跡から石製容器が出土した。IIIA-B 期に、出土個体数が飛躍的に増加すると同時に、下エジプトのタルカン遺跡およびミンシャト遺跡に出土の中心が移る。この時期になっても、上下エジプト間で器形上の差異がある。上エジプト地域では全遺跡で III 類が出土する一方、下エジプト地域ではそれらを欠いた様相を捉えることができる。上エジプト地域で北限に位置するマトマール遺跡では、IIIa2 類が 1 個体出土するものの、基本的に下エジプトの器種組成に近似する傾向にある。概ね下エジプト地域から距離的に遠隔になるにしたがい、下エジプト地域における器種組成とは異なる様相であるかもしれ

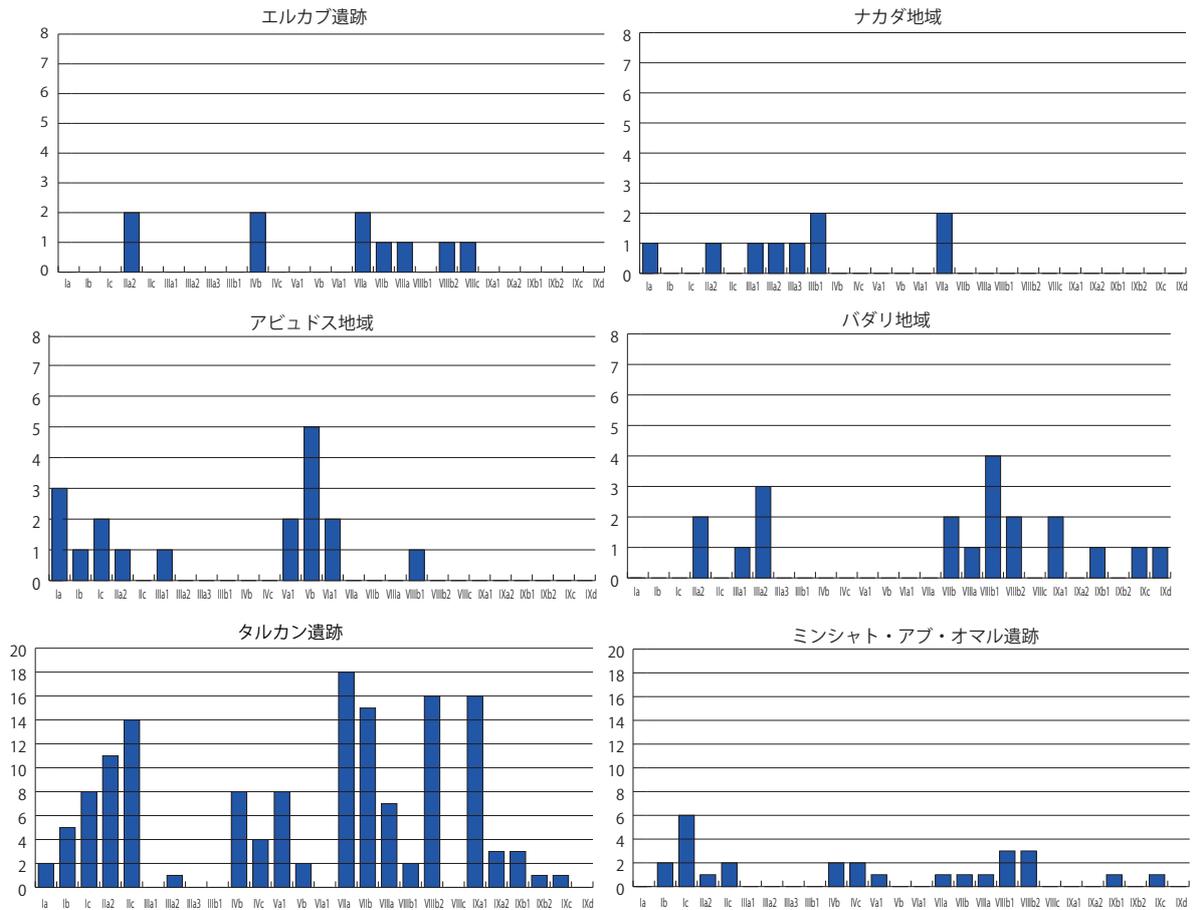


図7 IIIA-B期における器種構成

Fig.7 Shape Variation in IIIA-B

ない。しかし、エルカブ遺跡に関しては注意が必要である。というのも、エルカブ遺跡は、唯一上エジプト地域内の遺跡で下エジプト地域の器種構成と類似するからである。また、ミンシャト遺跡ではIc類が1点出土するが、このIc類は縄状把手を付属するものの極端に器高が低く、ビーカーに近い。このようなIc類は、IIA-B期のアムラ遺跡で早くから出土していることは、特記すべきである。

(2) 地域間の石材利用形態

① IC期 (図8)

石材構成については、マハスナ遺跡やバダリ遺跡で玄武岩を主体とする一方、ナカダ遺跡やアムラ遺跡ではトラバーチンを素材の中心とする傾向にあると言える。また、Ia類はほぼ全てトラバーチンで製作される傾向にあり、1点のみ石灰岩製がある。II類については、角礫岩1点を例外として、全て玄武岩から成る。VI類はトラバーチン、IXa2類は石灰岩からなる。

② IIA-B期 (図8)

石材構成については、ナカダ遺跡で石灰岩とトラバーチンが主体となるが、アムラ遺跡では玄武岩を素材の中心とする。バダリ遺跡とマトマール遺跡では、石灰岩のみから成る。特記すべきは、前時期にほぼ排他的にII類が玄武岩から構成されていたのに対して、当該期には石灰岩やトラバーチンからも製作され始め、器形と石材の対応関係が解体されることである。この傾向は全地域で認められるものの、ナカダ地域を除く

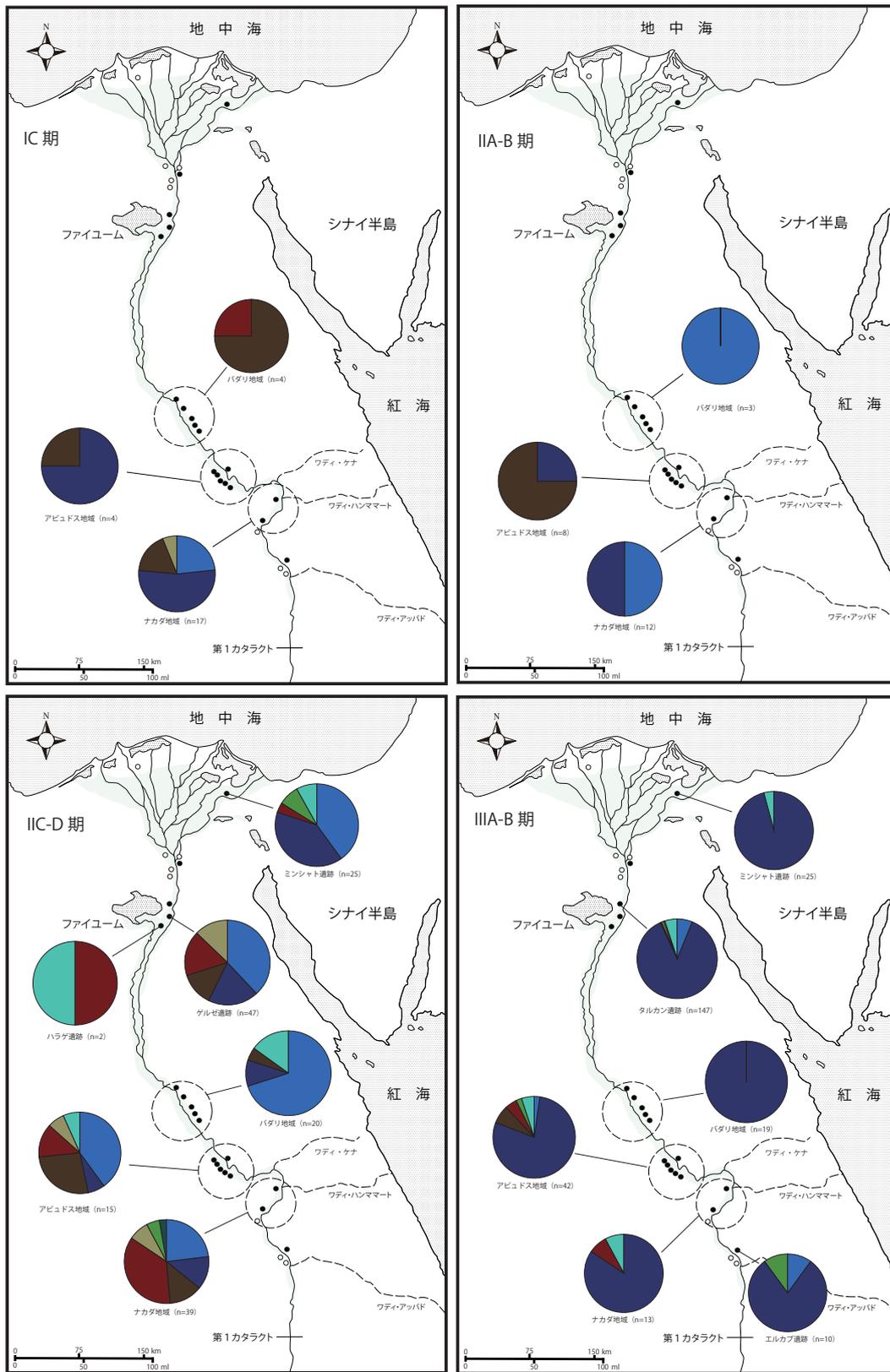


図8 各時期における石材構成
Fig.8 Stone Variation in Each Period

アビュドス地域やバダリ地域では、玄武岩製のII類は未だ一定量の出土している。すなわち、この解体の様相は、ナカダ地域を中心として認められることになる。

③ IIC-D 期 (図8)

全体的な石材構成について見ると、上下エジプト間でさほどの差異はない。石灰岩やトラバーチン、東部砂漠由来である角礫岩や斑岩の利用は、概ね共通した石材構成となっている。しかし、特異な点は、カウ遺跡・バダリ遺跡・モスタゲッタ遺跡・マトマール遺跡といったバダリ地域にある。バダリ遺跡の泥岩製容器1点を除き、当該地域から出土する石製容器は角礫岩や斑岩、泥岩をほとんど指向されていないと言ってよい。この地域の4遺跡は、基本的に石灰岩やトラバーチン、玄武岩の3種類を指向したようである。器形ごとに使用された石材構成を見ると、I類やII類、III類では石灰岩・トラバーチン・角礫岩が主体である。VI類やVII類、VIII類は、石灰岩・トラバーチンが用いられる一方で、I類やII類、III類に比べ、斑岩や泥岩も素材として指向されたと言える。

④ IIIA-B 期 (図8)

全体的には上下エジプト間で明瞭な差異を読み取ることができない。一方で、上エジプト地域で角礫岩がこの時期になっても利用され続けるが、下エジプトでは角礫岩を素材とした石製容器は出土しない。また、ハマミーヤ遺跡およびマトマール遺跡では、割合上は角礫岩と泥岩の利用は一定量見られるものの、上エジプトの他遺跡よりも圧倒的に少ないと考えられる。当該地域は、基本的に石灰岩とトラバーチンを主体とした素材の利用傾向が窺えるだろう。下エジプト地域では、相対的に角礫岩や斑岩などのような東部砂漠由来の石材が少量であり、トラバーチンを主体とする。しかし、それらと比較して、同様に東部砂漠由来である泥岩の利用率は高く、トラバーチン以外では、次いで泥岩あるいは石灰岩が当該地域では指向されていた可能性にある。基本的にトラバーチンは全器種への使用が認められるが、角礫岩や斑岩、泥岩はIII類に限られる

(3) 各時期の分布パターン

以上の分布パターンを各時期で類型化すると、図9～10のようになる。IC期では、上エジプト地域内部では、玄武岩製のII類のみを有するバダリ地域が特質的であり、VI類やIXa2類というイレギュラーな器形を除くとアビュドス地域とナカダ地域で器種構成・石材構成(Ia類:石灰岩、トラバーチン、II類:玄武岩)ともにまとまりをもつ。したがって、当該期の上エジプト地域はナカダ地域・アビュドス地域とバダリ地域という二極分化した様相にあると考えられる。

IIA-B期になると、玄武岩製容器の排他性においてアビュドス地域は他地域と一線を画す。翻ってナカダ地域とバダリ地域は石灰岩とトラバーチンのみからなる。また、ナカダ地域ではIII類が出現したことによって、他地域と異なる器種構成を見せる。アビュドス地域はほぼII類のみからなり、加えて他地域にはないIc類が出土する。この時期の石製容器の地域性は、3地域間で非常に複雑な様相を呈し、仔細に見るとそれぞれが独自性を有していると言える。

続くIIC-D期では、下エジプト地域のハラゲ遺跡とゲルゼ遺跡、ミンシャト遺跡が加わる。上エジプト地域内では、この時期になると器種構成上ほぼ違いはない。ただ、若干バダリ地域においてII類の指向性が強い。一方、下エジプト地域では、III類に加えてVII類・VIII類・IX類が中心的に出土し、トラバーチンに排他性がある。また、下エジプト地域では斑岩の全てがVII類・VIII類・IX類に用いられている一方で、上エ

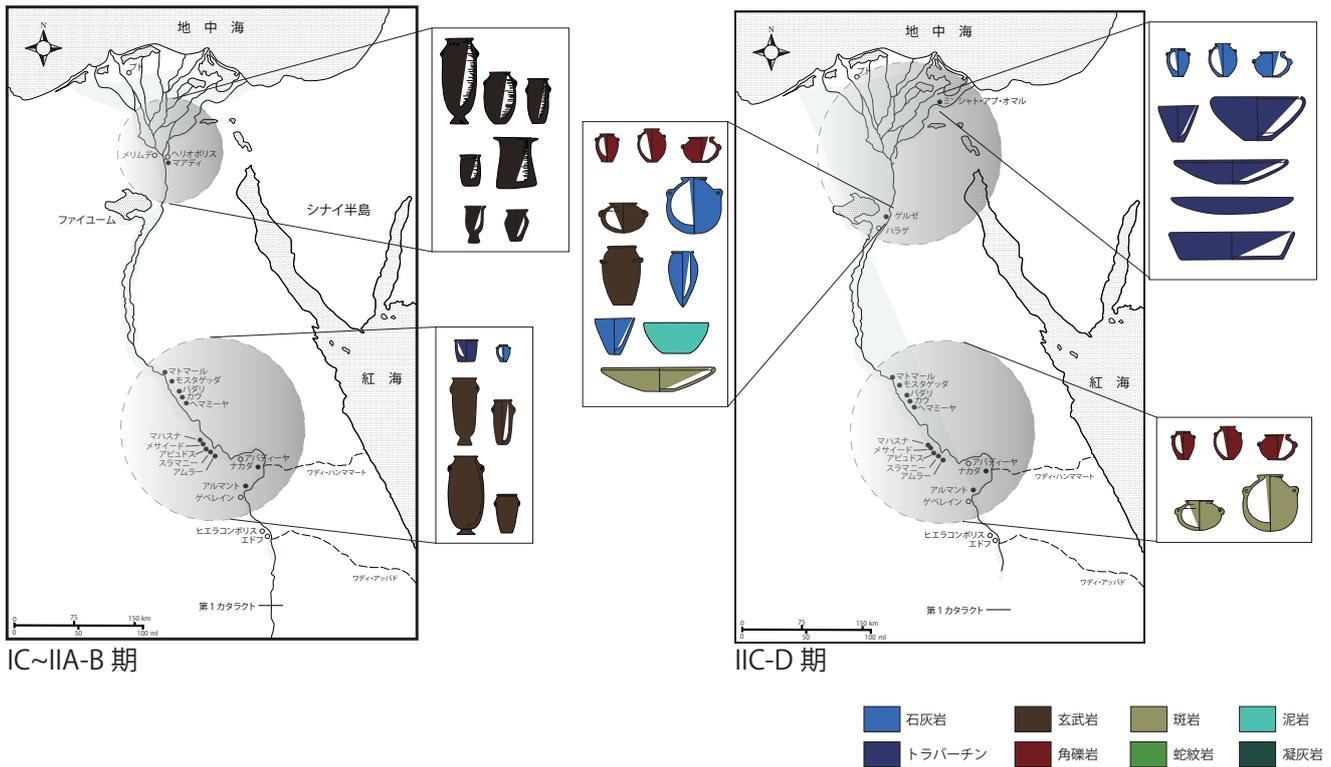


図9 IC ~ IIA-B 期および IIC-D 期における石製容器の地域性
Fig.9 Regional Variation of Stone Vessels in IC~IIA-B and IIC-D

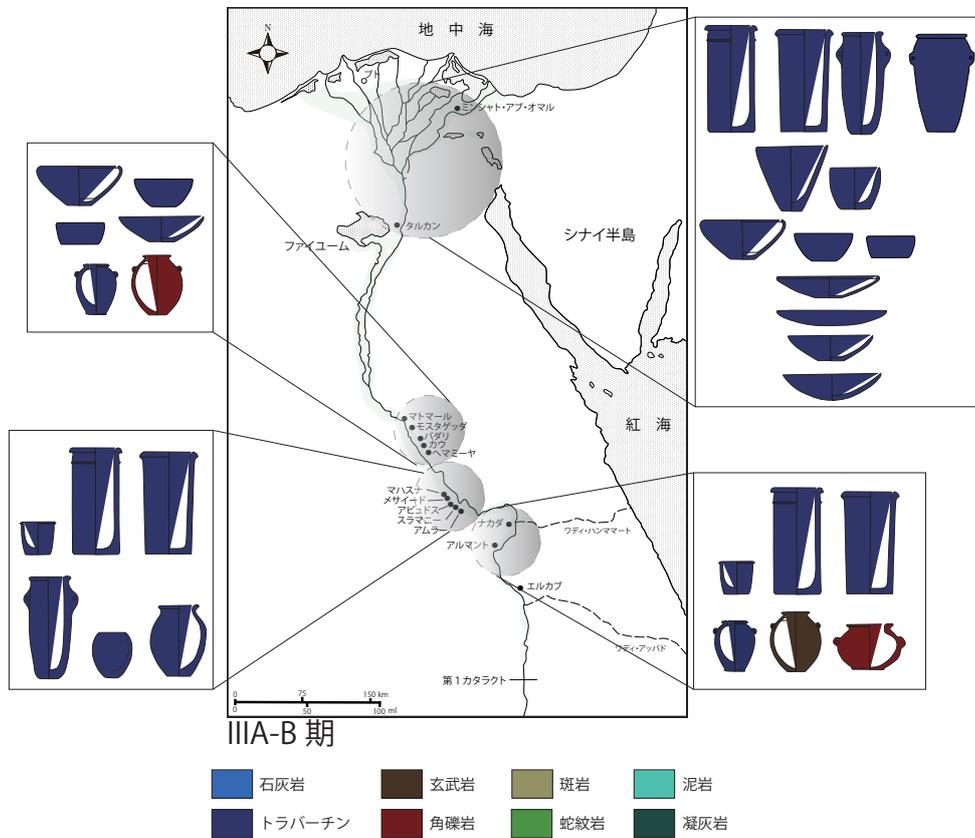


図10 IIIA-B 期における石製容器の地域性
Fig.10 Regional Variation of Stone Vessels in IIIA-B

ジプト地域では斑岩自体の使用がほぼ認められない。当該期では上下エジプト地域間で二極構造的な様相にあると言える。

最後に IIIA-B 期であるが、この時期に出土の中心は下エジプト地域のタルカン遺跡へ移行し、大きな変化を示す。下エジプト地域はトラバーチンを中心とした I 類および VII 類～IX 類である一方、上エジプト地域では III 類が排他性をもつ。基本的に III 類はナカダ地域に集中し、バダリ地域では若干数保有している状況にある。しかし、バダリ地域は VII 類～IX 類が主体的である。留意すべきは、アビュドス地域の器種構成である。アビュドス地域は、上エジプト地域よりもむしろ下エジプト地域の器種構成に近いものの、下エジプト地域を特徴づける VII 類～IX 類はほぼ出土が認められない。そのため、当該期は、下エジプト地域、バダリ地域、アビュドス地域、ナカダ地域がそれぞれ異なる様相を見せる。

6. 石製容器の地域的多様性における形成要因

石製容器は、土器や石器と異なり、各遺跡・地域における自立的な生産体制は認められず、大規模遺跡を中心とした集約的な生産にあったことが想定される (Köhler 1995)。つまり、各地域における文化伝統の差異とその収斂という形成要因をそこには想定し得ない。土器や石器などの器種や素材は、ナカダ II 期中葉ごろには、上エジプト地域内部で偏差は消失する (Köhler 1995, Savage 2011)。しかし、石製容器の分布は、むしろ時期を経るごとに地域間の差異は広がっていく変遷過程にある。この地域色の広がりや、物質文化的な統一期である IIC-D 期から顕在化する傾向にあり、同時に出土量も上下エジプト全域で急増する。続く IIIA-B 期には、石材はトラバーチンとして画一化を迎えるものの、一方で器種構成については地域色のさらなる多様化を認めることができる。すなわち、下エジプト地域における鉢・皿 (VII, VIII, IX 類)、上エジプト地域における壺 (III 類) という IIC-D 期以来の伝統性は継続し、且つバダリ地域などでは上下エジプト地域の折衷的な様相をもつ器種構成が見られる。こうした各時期の地域性は、大規模遺跡から他地域への分配・流通という現象が介在して形成されたと言える。石製容器の分布パターンの変遷も、大規模遺跡における集約的な生産および他地域への流通という視点から解釈する必要性にある。

まず、IC 期の段階では、ナカダ地域を中心に出土すること、本時期に主体である Ia 類の出土量がナカダ地域からバダリ地域へ地理的勾配を呈すること、ナカダ地域でのみ多様な器形が認められることなどを勘案した際、ナカダ地域を軸とした石製容器生産にあり、ナカダ・アビュドス両地域においてその流通圏は限定される。一方、Ia 類の出土量に次ぐ II 類については、全て玄武岩から構成されており、化学分析によってマアディ遺跡における集約的な生産であったことが指摘されている (Mallory-Greenough 1999, 2002)。つまり、II 類のみから構成されるバダリ地域は、マアディ遺跡から搬出した石製容器を受容するに留まり、ナカダ地域は II 類を受容する傍らで、Ia 類などを独自に生産していた。出土量自体が極端に少ないことから、バダリ地域で石製容器生産が行われていたとは言い難い。

続く IIA-B 期では、前時期と比べ器種構成に大差ないものの、III 類が出現し、また器形と石材の対応関係が解体されることに特徴づけられる。つまり、II 類が玄武岩だけでなく、石灰岩やトラバーチンなどからも製作される。それと同時に、ナカダ地域およびアビュドス地域では II 類が主体となる。これらのことから、上エジプト地域、特にナカダ地域において、II 類の在地生産化が認められる。III 類の出現と II 類の在地生産化は、マアディ遺跡からの搬入品に依存しない自立的な生産体制が当該地域で確立し始めたことを示さだろう。一方、アビュドス地域では、玄武岩製の II 類が大半を占め、マアディ遺跡から流通した製品を積極的に受容していたと考えられる。また、依然としてバダリ地域は Ia 類の出土は認められず、出土量自体が非常に少ない。おそらく、前時期と同様、自立的な生産ではなく、搬入品に依存していたと考えられる。

IIC-D 期になると、器種構成および石材構成ともに大きく変動する。この時期主体となる III 類は、ナカダ地域で生成された固有の器形であり、上エジプト地域内の石製容器生産は、II 類の生産地であったマアディ遺跡廃絶後に飛躍的に向上する（竹野内 2013）。III 類に嗜好された角礫岩や斑岩は、東部砂漠の紅海丘陵に産出し、泥岩についてはワディ・ハンママトにその産地が確認されている（Stevenson 2009）。一方で、その遠隔に位置する下エジプト地域のゲルゼ遺跡などで斑岩や泥岩、角礫岩が排他的な器形をもって認められる。この傾向は、少なくとも下エジプト地域で石製容器の生産拠点があって、そこへ上エジプト地域から原材自体あるいは製品が流通していたことを示すだろう。すなわち、上下エジプト地域間における器種構成と石材構成の二極構造的様相は、そのまま二極分化した生産拠点と下エジプト地域へ延びる流通ラインの形成を物語る。

IIIA-B 期では、大量生産型の石製容器の生産体制が形成される。おそらく下エジプト地域で生産された VII 類、VIII 類、IX 類などが、ナカダ地域からは III 類が、バダリ地域へ搬出された。ここでは、バダリ地域は、外部からの流通とその受容による石製容器に依存していた可能性を支持したい。一方で、ナカダ地域は IIA-B 期以来の伝統的な石製容器生産を保持していたことは、III 類の排他性から理解できる。同時に、IIC-D 期から生産してきた杯や鉢、皿といった下エジプト地域のゲルゼ遺跡などで固有の石製容器は、この時期になって大量生産といった形で、当該地域で引き継がれていく。IIC-D 期のゲルゼ遺跡集団は、IIIA-B 期に形成されたタルカン遺跡集団の母体であったことが近年指摘されている（Madsley 2012）。人間集団間の共通性という点からも、ゲルゼ遺跡における石製容器生産がタルカン遺跡へ引き継がれた可能性を支持するだろう。また、IIIA-B 期でさらに生産地は分化傾向にある。各地域における生産地の分化は、トラバーチンという石材の画一化によって促進された可能性が考えられる。しかし、アビュドス地域とエルカブ遺跡が、むしろ下エジプト地域の器種構成に近いことは、ナカダ地域とはすでに異なる石製容器生産のあり方であったか、あるいは下エジプト地域からの搬入品に依存していたかのいずれかが考えられる。生産地の分化という背景は、近年のテル・エル＝ファルカ遺跡での調査成果からも裏付けられる。当遺跡では、石製容器製作に関連する遺物（石製穿孔器など）が出土し、先王朝時代末期ごろには、小規模な石製容器生産が地方レベルで行われていた可能性が指摘されている（Jórdeczka 2004）。

このように、IIA-B 期までに上エジプト地域で確立した石製容器生産は、IIC-D 期になると下エジプト地域への流通が指向され、さらにナカダ文化の広がりやマアディ遺跡の廃絶によって、生産地は上下エジプト地域間で二極構造を呈する。続く IIIA-B 期では、おそらく各地域に生産地が存立し、バダリ地域のみが下エジプト地域とナカダ地域双方向からの搬入品に依存していたのだろう。また、一貫してバダリ地域では、角礫岩や斑岩、泥岩など東部砂漠由来の石材を素材とした他製品がほとんど見られない。このことは、原産地近郊のナカダ地域もしくはアビュドス地域を含めた核地域が概して生産の拠点であり、その遠隔地域であるバダリ地域では製品のみがもたらされた傍証となろう。先王朝時代の石製容器の地域性は、こうした生産と流通における地域間関係によって生成されていたと考えられる。

7. おわりに

土器や石器の分析からは、少なくともナカダ II 中期ごろまでには上エジプト地域の物質文化は均質的になる（Holmes 1989, Friedman 2000）。しかし、石製容器の分布が、時期を経るごとに均質化するのではなく、むしろ地域的多様性は顕在化する様相にある。その要因となったのは、ひとえに生産地の分化と複雑な流通システムの発展にあった。石材資源へのアクセスが脆弱なバダリ地域では、他地域からの搬入に依存する他なかった。その一方で、さらに東部砂漠から遠隔にあるゲルゼ遺跡などで一部石製容器の生産が認められる

ことは、下エジプト地域へ延びる流通システムが指向され、IIC-D 期以降の地域間関係の再編成が背景にあるだろう。IIIA-B 期で最も地域的多様性が生成されることも、初期国家形成という時代の社会が要請した地域間関係、あるいは支配権力の地域的構造に基づく生産と流通の体制への変化にその要因を求めることができる。

こうした石製容器の地域性の変遷は、文化的統合というよりも、むしろ政治的統合のプロセスをその動態から跡づけることができる可能性にある。政治的な組織間の相互作用という視点から石製容器は捉えるべきである。それは、奢侈品あるは「威信財」の分布パターンが、日用品の分布パターンと異なることと同様であり、概して社会の政治経済という側面を表しやすい遺物であることに他ならないからだろう。このような視点から地域統合過程を再考する一助となれば、本稿の目的は達せられたと言えよう。

今後は、伝世品などの問題を含め、石製容器の分類および編年を精査し、地域編年をより仔細なものにする必要がある。

謝辞

本稿は、2013 年度に早稲田大学大学院文学研究科考古学コースで提出した修士論文の一部を骨子としている。修士論文の執筆時から、指導教員である文学学術院教授の近藤二郎先生にご指導を賜った。また、副査である早稲田大学高等研究所の河合望先生、早稲田大学エジプト学研究所の馬場匡浩氏、早稲田大学文化構想学部助手の長屋憲慶氏には、修士論文執筆時はもとより、日頃から有益なお話を聴かせていただいている。ここに厚く感謝を申し上げたい。

註

- 1) 一方で、このような見解を古典モデル (Classical Model) とし、近年では批判的な視座に立つ傾向がある。アダムス (Adams, B) やフリードマンらは、ピートリの土器分類でいう粗製土器 (Rough ware) は、上下エジプト全域で早い段階から出土し、そこに地域差は確認できないとしている (Adams and Freidman 1992)。また、ケーラー (Köhler, C) によると、デルタ地帯西部に位置するプト遺跡の集落址出土土器は、ナカダ文化波及以降も、世帯レベルでは製作され続け、上エジプトの影響は認められない (Köhler 1995)。石器研究の領域からは、捻れ状石刃や裁断加工器はナイル川下流域全域において IId2 期以前からすでに共通性を持っていたと考えられている (Schmidt 1996)。すなわち、近年の研究から、ナカダ文化の波及以前も上下エジプト地域間において物質文化的な共通項は存在し、いわゆる「文化的」地域性と考えられていた現象は、あくまで地理的・生態学的な差異に起因するものであり、地域的多様性 (Regional variation) として理解しなければいけない。
- 2) 本来であれば、先王朝時代の重要なセンターであるヒエラコンポリス遺跡も扱わなければいけない。しかし、当該遺跡出土の石製容器は、破片資料が多く、比較的まとまった報告がなされている「要塞墓地 (Fort Cemetery)」でもヘンドリックス編年に対応していない。そのため、本稿では、当該遺跡を扱わないこととする。
- 3) 器高/胴部最大径の割合は、VII 類が 2:3 以上、VIII 類が 2:3 未満、1:3 以上、IX 類が 1:3 未満とした。
- 4) 岩石の同定は、各遺跡の発掘調査報告書に依拠しているが、石材名称については、一部誤りがあるため、本稿では訂正して扱う。まず、報告書内ではアラバスター (Alabaster) とされているが、岩石学的及び地質学的にはトラバーチンが正しい (Harrell 2013)。続いて、大理石 (Marble) については、エジプトでは純粋な大理石があまり産出しないため、石灰岩とする (Aston 1994)。また、報告書内では、しばしば粘板岩 (Slate) や片岩 (Schist)、硬砂岩 (Greywacke) と表記されているが、地質学上これらは、泥岩 (Mudstone) あるいはシルト岩 (Siltstone) が正しい (Klemm and Klemm 2008)。本稿では、泥岩という名称を用いる。凝灰岩については、火山灰 (Volcanic Ash) として報告書では表記されるが、正確には凝灰岩 (Tuff or Tuffaceous Rock) である (Harrell et al 2000)。

参考文献

- Baumgartel, E. J.
1970 *Petrie's Naqada Excavation: a Supplement*, London.

- Brunton, G.
 1927 *Qau and Badari I*, London.
 1937 *Mostagedda and the Tasian Culture*, London.
 1938 *Matmar*, London.
- Brunton, G. and Caton-Tompson, G.
 1924 *The Badarian Civilisation and Predynastic Remains near Badari*, London.
- Engelbach, R.
 1923 *Harageh*, British School of Archaeology in Egypt, London
- Friedman, R. F.
 1994 *Predynastic Settlement Ceramics of Upper Egypt: A Comparative Study of the Ceramics of Hemamieh, Nagada, and Hierakonpolis*, Department of Near Eastern Studies, University of California, Berkeley, University Microfilms International, Ann Arbor.
- Finkenstaedt, E.
 1980 "Regional painting styles in Predynastic Egypt", *Zeitschrift für Ägyptische Sprache und Altertumskunde* 107: 116-120.
 1981 "The location of styles in painting: White cross-lined ware at Naqada", *Journal of the American Research Center in Egypt* 18: 7-10.
- Guyot, F.
 2008 "The Origins of Naqadan Expansion and the Interregional Exchange Mechanisms between Lower Nubia, Upper and Lower Egypt, the South Levant and North Syria during the First Half of the 4th Millennium", in Midant-Reynes, B. and Tristant, Y. (eds.), *Egypt at Its Origins 2*, pp.707-740, Leuven.
- Harrell, J. A.
 2013 "Ornamental Stones", *UCLA Encyclopedia of Egyptology*, UC Los Angeles
- Harrell, J. A., Brown, V. M and Masoud, M. S.
 2000 "An Early Dynastic Quarry for Stone Vessels at Gebel Manzal El-Seyl, Eastern Desert", *The Journal of Egyptian Archaeology* 86, pp.33-42.
- Hendrickx, S.
 1996 "The Relative Chronology of the Naqada Culture: Problems and Possibilities", in Spencer, J. (eds.), *Aspects of Early Egypt*, pp.36-69, London.
 2006 Predynastic-Early Dynastic Chronology, in Hornang, E., Krauss, R and Warburton, D.A. (eds.), *Ancient Egyptian Chronology*, Leiden and Boston.
- Jórdeczka, M.
 2004 "Stone Implements from Tell El-Farkha", in Hendrickx, S., Friedman, R.F., Cialowicz, K.M., and Chlodnicki, M. (eds.), *Egypt at Its Origin*, pp.443-463, Leuven.
- Kaiser, W.
 1957 "Zur Innen Chronologie der Naqadakultur", *Archaeologia Geographica* 6, pp.69-77.
- Klemm, R. and Klemm, D.D.
 2008 *Stones and Quarries in Ancient Egypt*, London.
- Köhler, E.C.
 1995 "The State of Research on Late Predynastic Egypt: New Evidence for the Development of the Pharaonic State?", *Göttinger Misyellen* 147, pp.79-92.
 2008 "The Interaction Between and the Roles of Upper and Lower Egypt in the Formation of the Egyptian State. Another View", in Midant-Reynes, B. and Tristant, Y. (eds.), *Egypt at Its Origins 2*, pp.515-543, Leuven.
- El-Kouli, A.
 1978 *Egyptian Stone Vessels: Predynastic Period to Dynasty III Typology and Analysis*, Mazin.
- Kroeper, von. K. and Wildung, D.
 1994 *Minshat Abu Omar I Ein vor und frühgeschichtlicher Friedhof im Nildelta Gräber 1-114*, Mainz
 2000 *Minshat Abu Omar II Ein vor und frühgeschichtlicher Friedhof im Nildelta Gräber 115-204*, Mainz
- Mawdsley, L.
 2012 "The Foundation and Development of Tarkhan During the Naqada IIIA2 Period", in Evans, L. (ed.), *Ancient Memphis: 'Enduring is the Perfection'*, pp.331-348, Leuven.
- Mallory-Greenough, L.M.
 1999 "The Stone Source of Predynastic Basalt Vessels: Mineralogical Evidence for Quarries in Northern Egypt", *The Journal of Archaeological science* 26, pp.1261-1272.

- 2002 “The Geographical, Spatial, and Temporal Distribution of Predynastic and First Dynasty Basalt Vessels”, *The Journal of Egyptian Archaeology* 88, pp.67-93.
- Mond, R.
1937 *Cemeteris of Armant I*, London.
- Payne, J. C.
1987 “Appendix to Naqada Excavations Supplement”, *The Journal of Egyptian Archaeology* 73, pp.181-189.
1993 *Catalogue of the Predynastic Egyptian Collection in the Ashmolean Museum*, Oxford.
- Petrie, W.M.F.
1896 *Naqada and Ballas*, California.
1912 *The Labyrinth Gerzeh and Mazghuneh*, London.
1913 *Tarkhan I and Memphis V*, London.
1920 *Prehistoric Egypt*, London.
- Randall, D.M.C. and Mace, A.C.
1902 *El Amrah and Abydos*, London
- Rizkana, I. and Seeher, J.
1984 “New Light on the Relation of Maadi to the Upper Egyptian Cultural Sequence”, *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts Abteilung Kairo* 10, pp.237-252.
1987 *Maadi I: The Pottery of the Predynastic Settlement*, Mainz am Rhein.
1988 *Maadi II: The Lithic Industries of the Predynastic Settlement*, Mainz am Rhein.
- Sampson, B. M.
2003 *Traveler's Guide to the Geology of Egypt*, Cairo and New York.
- Schmidt, K.
1996 “Lower and Upper Egypt in the Chalcolithic Period. Evidence of the Lithic Industries: a View from Buto”, in Krzyzaniak, L., Kroeper, K., & Kobusiewicz, M. (eds.), *Interregional contacts in the later prehistory of Northeastern Africa*, Poznan.
- Stevenson, A.
2009b *The Predynastic Egyptian Cemetery of El-Gerzeh: Social Identities and Mortuary Practices*, Leuven.
- Way, T. von der
1989 “Tell el-Fara'in-Buto. 4. Bericht”, *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts. Abteilung Kairo* 45, 275-307.
1993 “Untersuchungen zur Spätvor- und Frühgeschichte Unterägyptens”, *Studien zur Archäologie und Geschichte Altägyptens* 8, Heidelberg.
- Way, T, Köhler, C and Schmidt, K.
1988 “Tell el-Fara'in- Buto, 3. Bericht, *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 44, pp.283-306.
- 竹野内恵太
2013 「ナイル川下流域における石製容器の出現と展開に関する一考察」『エジプト学研究』第19号、135-177頁。

エジプト学研究 第20号

2014年3月31日発行

発行所 / 早稲田大学エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.20

Published date: 31 March 2014

Published by The Egyptological Society, Waseda University

1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Institute of Egyptology, Waseda University